

エゼキエル書29章6-7節 「葦の杖」

1A 松葉杖

1B バビロンに面するユダ

2B 全ての人にある松葉杖

2A 自分を痛める葦の杖

1B 人という杖

2B 物質にある杖

3B 宗教の杖

3A イエスを杖とする人々

1B 福音書の人々

2B 主にあって強める働き

本文

エゼキエル書 29 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、先週で 28 章まで来ました。が午後礼拝で、29 章から 32 章まで読みたいと思います。全て、主がエジプトに対して語られた裁きの宣言です。今朝は、29 章 6-7 節に注目します。「**6 エジプトの住民はみな、わたしが主であることを知ろう。彼らが、イスラエルの家に対して、葦の杖にすぎなかったからだ。7 彼らがあなたの手をつかむと、あなたは折れ、彼らのすべての肩を砕いた。彼らがあなたに寄りかかると、あなたは折れ、彼らのすべての腰をいためた。**」

1A 松葉杖

1B バビロンに面するユダ

時は、バビロンがエルサレムを包囲していた頃の預言です。ユダの王ゼデキヤは、エジプトに特使を送って、バビロンが攻めてきた時には援軍に来るという約束を取り付けていました。そして今、包囲されています。エジプトは軍を北に派遣したのです。それでバビロンの軍隊はエルサレムの包囲を一時解除して、エジプトと戦わなければいけません。それで、ユダの王ゼデキヤは、預言者エレミヤに主の御心を伺ったのです。これによって、エルサレムは救われるかもしれない、エジプトが最後の頼みに綱なのだと思いたかったのです。

しかし主は、このようにお答えになりました。「37:7-10 わたしに尋ねるために、あなたがたをわたしのもとに遣わしたユダの王にこう言え。見よ。あなたがたを助けに出て来たパロの軍勢は、自分たちの国エジプトへ帰り、カルデヤ人が引き返して来て、この町を攻め取り、これを火で焼く。』主はこう仰せられる。『あなたがたは、カルデヤ人は必ず私たちから去る、と言って、みずから欺くな。彼らは去ることはないからだ。たとい、あなたがたが、あなたがたを攻めるカルデヤの全軍勢

を打ち、その中に重傷を負った兵士たちだけが残ったとしても、彼らがそれぞれ、その天幕で立ち上がり、この町を火で焼くようになる。」パロの軍勢の助けは、実に中途半端なものでした。すぐに自分たちの国、エジプトに戻ったのです。そして、カルデヤ人、バビロンの軍は戻ってきます。降伏するのではなく、このように反逆と裏切りの姿勢を見せたので、ますますバビロンを怒らせました。それで彼らが破れ口から入って来た時、家々に火を付けて、生きている者たちを虐殺し、神殿にあるものを根こそぎ、奪い取っていきました。

エジプトに頼れると思っていたところが、全く頼りにならず、むしろ頼ってしただけのために自ら傷を負ってしまったのです。それが、「葦の杖」と例えられています。皆さんは、もちろん杖が何を意味しているかお分かりですね。松葉杖と言えば、「寄りかかるもの」であることは知っています。エジプトのナイル川には葦が生えています。その葦は、しっかりと生えていて、茎がしっかりしているようにも見えます。しかし、イネ科の植物であり、稲の茎に投げかかったら、腕も肩も地面に倒れて傷を受けてしまうように、葦の杖も同じです。エジプトが助けると言って来た約束は、まとものものであって、期待をかけるようなものであったけれども、ちょっとした圧力で折れてしまって、それにより頼んでいたユダが傷を受けました。

2B 全ての人にある松葉杖

私たちには、心の中に松葉杖を求めています。自分が窮地に立たせられている時に、すがりたいたい投げ所を持っています。そんなものは持っていない、と書いていても、必ず持っています。心の投げ所を求めています。私が、初めて教会というところに行ったのは、高校生の時でした。友人が、「英会話クラスがあるから」ということで誘われていきました。そこは教会だったのです。髭を生やした良きそげな白人の宣教師の人と、女性が何人か同じテーブルにいました。私はこの中で思っていました。「なんか、外国からの要所みたいだな。そして教会は女や弱い奴しか来ないからな。これは日本男児だから、仏教だ。」教会にいる奴らは弱い人々だ、つまり宗教や信仰を松葉杖にしている、と書いていたのです。

ところが、私には大きな問題がありました。受験勉強によって精神的に追い詰められていたことです。勉強しなければいけないと思えば思うほど、かえって他のことをやりました。それで成績が芳しくないとともに、落ち込みました。その悪循環の中で抑鬱の症状が出ていたようです。自分は教会の人々は松葉杖を持っている弱いだ、と書いていましたが、私自身が松葉杖を必要としている患者だったのです。そしてずっと後に、イエス・キリストご自身により頼む道を選びました。

大学生の時ですが、今度は自分の同級生や友人に、自分がクリスチャンになったことを伝えました。近くにいる者たちは、警戒する人が多かったです。一人、結構それでも仲良くしてくれていた人が、私がクリスチャンになったことを、「可哀想だな」というような見方で話していました。心に投げ所が必要なんだよね、という見方で。ところがその同じ会話で、彼が今、行っている講座か

講習かを話し始めました。彼はギターをやっていた人ですが、その話をした後で、その講座のような話を持ち始めたのです。聞き続けたら何のことはない、自己啓発セミナーです。私は、それにはまったら、多額の金を巻き上げられるよと警告しました。彼も、はっと気がついていましたね。他人を見て、松葉杖を付いているなどと思う時は、実は自分自身が違う杖を持っているのです。つまり、全てが松葉杖を持っています。

2A 自分を痛める葦の杖

1B 人という杖

私たちには、いろいろな松葉杖があります。その一つは、「人間関係」です。自分がとても苦しくなって、窮地に陥った時に誰かに分かってもらおうとします。そして、その人たちから心の支援を受けて、安心したいと思います。その人たちから助言も受け、自分のしていることに同意をしてもらいたいと思います。そして、物事がうまく行かなくなった時は、その人は自分の側に付いてくれると期待しています。しかし、その人が真実な友人なのかどうかは、苦しみの時に真価が試されます。多くの場合、その人たちが友人ではなかったことが判明します。自分の魂も明かしてしまうぐらい信頼していた人が、その信頼を裏切り、その情報を、自分を傷つける形で使ってしまうこともあるでしょう。

それで、「この人には裏切られた」と言っているのですが、不信を抱くのですが、不信を抱けば抱くほど反比例して、さらに人々に自分の意識は向かいます。人を信頼してはいけないと思うのですが、むしろ誰か信頼できる人を貪るようにして探しているのです。どんどんその意識は強くなり、愛されること、構ってもらえることに飢えてしまいます。しかし、人も限界がありますから、その期待には応えられません。人を松葉杖にしつづけることによって、むしろ自分自身がかたがた傷ついていきます。

2B 物質にある杖

私たちは、他にも松葉杖を持っています。ある人はお酒でしょう。とても辛いことがある時、そのストレスや悲しみを和らげようとおもって、お酒に走ります。それは社交的な飲酒で始まったのですが、その酔い加減がとても良く、それで病みつきになります。けれども、自分の持っている問題は解決しているわけではなく、もっと飲酒量が増えます。すると、その問題に取り組まなければいけないのに、飲酒によってさらに生活のバランスが崩れて、問題が増えていきます。お酒そのものが問題となっていきます。これではいけないと、他の人たちが心配するのですが、本人は大丈夫だと言い張ります。そうです、問題の渦中にいると、自分が問題の渦中にあることが分からなくなってしまうのです。

他にも、薬への依存もあるでしょう。病になりました。それで医者に行き、診断されたとおりの薬を飲みます。けれども、一行に症状が良くなりません。それでもっと良い医者はいないか探します。

ところが、もっと症状が悪化します。それでどんどん、不安になります。それで今度は、別の薬も与えられます。それで、薬の飲み過ぎという新たな問題が出てきます。自分を直せると思って頼っていた薬が、どんどん自分を傷つけていくようになります。

そして、いろいろなものにのめり込む自分を刺激し、楽しませるものがあります。テレビ・ドラマにはまる人。コンピューター・ゲーム。アイドルやコスプレ。また、ソーシャル・メディアも、互いに自己確認するようなもので、のめり込むでしょう。そして、先ほど言及しました、自己啓発セミナーのようなものもそうでしょう。

3B 宗教の杖

そして、「宗教」というものも、松葉杖になります。日本には、宗教法人の数が約 18 万 1 千あります。そして信者数が、なんと 1 億 9 千万人になります。日本の総人口が 1 億 2 千万人ぐらいですから、総人口よりも多い信者がいるということです！それだけ、何かがあると無病息災ということでしょうか、宗教に抛り頼んでいます。しかし、それでいろいろお金をつぎ込んで、どんどんその組織にがんじがらめになっていきます。

3A イエスを杖とする人々

そこで多くの人々が、そこでイエスご自身についても、「単なる松葉杖だろう」と言います。私がかつて、高校生の時に心で思ったことですし、また哲学者ニーチェも、「キリスト教は、弱い者の松葉杖だ」と言いました。そのことに対する返答はどうすればよいでしょうか？「そうです、イエス様こそが、私の松葉杖です。」と答えます。私はとても弱いです。毎日、毎時間、一瞬、一瞬、この方に頼らなければ、すぐに倒れてしまうような存在です。パウロは私たちに、「絶えず祈りなさい。(1テサロニケ 5:17)」と教えました。絶えず祈らなければ、すぐに悪を行ない、罪を行ないかねない弱い存在であります。

1B 福音書の人々

そして、その弱さこそが、イエス様が願っておられることであることを知るのには、慰めです。私たちが自分自身にあって強くなって、イエス様に頼らなくなってよくなるようになることを、イエス様は望んでおられません。いや、それこそが最も悲しむべき罪です。わたしから離れては、何もできないのだとイエス様は教えてくださいました。したがって、私たちはいつも、初めて福音を聞いて信じた時と同じように、罪人として、神の憐れみをいただくために願う者であり、十字架から決して卒業することはないのです。

イエス様が、「あなたの信仰があなたを救った」と言われた人々は、イエス様を松葉杖とした人々でありました。十二年間、長血を患った女の事を思い出してください。彼女は初め、医者をも松葉杖にしていました。「マルコ 5:26 この女は多くの医者からひどいめに会わされて、自分の持ち物をも

な使い果たしてしまいましたが、何のかいもなく、かえって悪くなる一方であった。」とあります。けれども、彼女はイエス様の噂を聞きます。月のさわりや、血を流していれば不浄の期間であり、人に触れてはいけなかったのですが、彼女はお構いなしに、群衆に紛れ込みました。そして、勝手に、イエス様の着物に触ることさえできれば、きっと直ると思って、触ったのです。すると、血が止まりました。イエス様は立ち止まり、ご自分から力が出て行ったと言われて、それで、「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して帰りなさい。(5:34)」と言われたのです。

バルテマイという盲人の乞食もいましたね。イエス様がエリコに来られるとき、弟子たちや群衆が大勢歩いていました。そこにバルテマイが物乞いをするために道端に座っていましたが、ナザレのイエスだと分かると、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と叫び始めました。大勢が黙らせようとたしなめましたが、なおのこと叫び立てます。それでイエス様が、「わたしに何をしてほしいのか。」と言われると、「先生。目が見えるようになることです。(マルコ 10:51)」とはっきりと言いました。そしてイエス様が、「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」と言われました。

2B 主にあって強める働き

イエス様こそが、私たちを支えてくださいます。この方にあって強められる必要があるし、また互いに強める必要があります。エゼキエル書においては、エジプトに対して神が裁きを行われる理由の一つは、これが葦の杖にしか過ぎなかったからだ、ということです。彼らが、助けると言ったのに、助けなかったということ、中途半端だったということも責められています。「彼らが、イスラエルの家に対して、葦の杖にすぎなかったからだ。」とあります。

私たちは、主にあって助ける、人々を強めるように求められています。独りだけでは生きて行くことはできません。「ガラテヤ 6:1-2 兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。」私たちは弱い存在です、だから互いの重荷を負い合うことによって、キリストの律法、すなわち互いに愛し合いなさいという戒めを全うします。ヘブル書の著者は、いっしょに集まることを勧め、「互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。(10:24)」と言っています。そしてテサロニケ人への手紙第一には、「5:14 兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。」とありました。ですから、私たちは自分自身が主により頼み、その中で他の人々、小心な者を励まし、弱い者を助けることが必要です。

イエス様は、私たちの真実な杖となってくださいます。私たちを支えることができます。弱い時に支え、力のない時に持ちあげてくださいます。ですから、他のところにいくことは愚かなことです。こ

の方以外の所で、頼って安心感を得ようとするのは愚かなことです。世や世の欲は減んでしまいます。けれども、御心を行なうものがながらえるのです。キリストこそが堅い岩であり、他のところは沈みゆく砂なのです。